The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「現場力」ノオト(2011年・秋)
Author(s)	西村, ユミ; 小林, 恭; 中原, 京子 他
Citation	Communication-Design. 2012, 6, p. 103-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「現場力」ノオト（2011年・秋）

西村ユミ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）
小林 恭（大阪大学CSCD）
中原京子（大阪大学大学院言語文化研究科・博士課程）
池田光穂（大阪大学CSCD）
樫本直樹（大阪大学CSCD 招へい教員）
本間直樹（大阪大学CSCD ／大阪大学大学院文学研究科）
上條美代子（看護師）
西川 勝（大阪大学CSCD）
岡野彩子（大阪大学CSCD 招へい研究員）
高橋 綾（大阪大学CSCD 招へい教員）

“Genba-Ryoku” Note (Fall 2011)

Yumi Nishimura (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)
Kyo Kobayashi (CSCD, Osaka University)
Kyoko Nakahara (Graduate School of Language and Culture, Osaka University)
Mitsuho Ikeda (CSCD, Osaka University)
Naoki Kashimoto (Visiting Academic Staff, CSCD, Osaka University)
Naoki Homma (CSCD / Graduate School of Letters, Osaka University)
Miyoko Kamijo (Nurse)
Masaru Nishikawa (CSCD, Osaka University)
Ayako Okano (Visiting Researcher, CSCD, Osaka University)
Aya Takahashi (Visiting Academic Staff, CSCD, Osaka University)

「現場力研究会」は、2011年9月末までに121回（5年6ヵ月）開催された。「『現場力』ノオト（2011年・秋）」は、2011年度の前半に開催した研究会での議論をもとに、参加者一人ひとりが関与している多様な「現場」、そこでの出来事や経験、その場の特徴、テーマなどを理解するための「ことば」を取り上げたものである。本稿では、12編の気になる現場の事象やその論点を紹介する。なお、この半年間に2度、台風のために休会になったことも記録に留めておきたい。

キーワード
現場力、参加、経験
Genba-Ryoku (Empowerment faculty and sensibility in practice), participants, experiences

まえがき

私たちが、私たちにとっての「現場」で、日常的に行っていること。その多くは、既に習慣化されており、自覚したり注意を向けたりすることが難しい。しかし、その習慣の中には、私たちの様々な実践を成り立たせている「知」が埋め込まれている。

「現場力研究会」では、私たちが現場と名づける場での出来事や、その現場に参加する者たちが自明視していることを、参加者たちとの議論を通して捉え直し、これまでとは違った

理解や意味づけをすることを試みている。そのため、ハッとさせられることやそれまで拘っていた何かから解放される経験をすることもある。またその議論は、ときに議論のスタイルや研究会のあり方までを問い直す営みにもなっている。

こうした試みである「現場力研究会」は、2011年9月末で121回を数える。「『現場力』ノオト」は、この研究会での議論をもとに、私たちが暮らしたり活動したりする多種多様な現場の営みや概念を、一人ひとりの参加者がじっくり考えて綴った「ノオト」である。既に、「『現場力』研究術語集」として『Communication-Design』の0～2号（西村他［2007］［2008］［2009］）に26の術語を、4、5号の「『現場力』ノオト」（西村［2011a］［2011b］）には22のことばを紹介してきた。

本稿では、2011年度前半の研究会における議論や、これらの議論に関連して参加者が関心をもった現場の営みから編み出された、12編の気になる現場の事象やことば、その論点を紹介する。この間私たちは、病院の事務部や教育現場での実践等々について議論してきた。台風による研究会の中止も経験した。議論の内容もさることながら、開催するか否かに悩んだり、連絡を取り合ったりすることもまた、研究会という現場の出来事として経験した。それらが、この「ノオト」の下地となっている。ここで紹介した「ことば」が、現場において使用されつつ吟味され、同時に現場に組み込まれていくことを期待したい。

引用文献

西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・鳥海直美・池田光穂・伊藤京子・工藤直志・西川勝・仲谷美江・渥美公秀（2007）「「現場力」研究術語集」『Communication-Design 2006』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：215-229.

西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・池田光穂・工藤直志・高橋綾・仲谷美江・山崎吾郎・西川勝（2008）「「現場力」研究術語集（第2報）」『Communication-Design 1』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：203-216.

西村ユミ・志賀玲子・池田光穂・山崎吾郎・仲谷美江・本間直樹・高橋綾・菅磨志穂・西川勝・松本篤（2009）「「現場力」研究術語集（第3報）」『Communication-Design 2』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：189-201.

西村ユミ・西川勝・池田光穂・高橋綾・樫本直樹・本間直樹・安田伸行・小林恭（2011a）「『現場力』ノオト（2010年・秋）」『Communication-Design 4』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：87-100.

西村ユミ・小林恭・安田伸行・岡野彩子・池田光穂・樫本直樹・本間直樹・西川勝・上條美代子・高橋綾（2011b）「『現場力』ノオト（2011・春）」『Communication-Design 5』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：81-93.

（西村ユミ）

1. 「好奇心」から現場力はうまれるか　―「想定外」とは何なのか―

古代人が、もし自動車を目の当りにすれば大いに驚き好奇心にかられるであろう。しかし見慣れてしまうと好奇心は薄れる。自動車の何たるかを知ることなく、たくみにそれをあやつる技術（knowing how）は習得するかもしれない。未開時代の人類も素晴らしい技術をもっていた。人間は「出来る」と「知る」と二つがあれば、「出来る」方に走りたがる。したがって何時の時代にも、「知る」ことより「出来る」ことのほうが一歩先んじていることとなる。知よりも出来るを優先することを「野蛮」とよぶならば、知を軽視する二人の人間のうち、技法にたけて多くの知を軽視することが大きい方がより野蛮である。古代人より文明人がより野蛮となるゆえんであろう。

アリストテレスは、目新しいものに驚きたがる好奇心ではなく、見慣れて珍しくないものに、「これの本質は何なんだろう」と知がめざめることを「タウマゼイン（驚き）」とよんだ。ニュートンはリンゴの落下に、アルキメデスは銭湯での湯の浮力に驚きをたてたと伝えられる。これらは好奇心とは異なる。やっかいなことに、見慣れたあたりまえのことのなかに「想定外」のものをみて驚きをたてるセンスと、好奇心にたよることとは、相反するところがある。本当の注意深さというものが難しい理由であり、教育学の領域でも充分な解決は得られていないと言っても過言ではない。

見慣れたものに異化作用をほどこして注意をよびさます手法は、それなりの存在理由はあろうが、タウマゼインまでには届かないと思われる。マグニチュード9などの異変を機縁にようやく「想定外」という言葉をめぐる議論が高まるのは、野蛮である証拠といってよい。木の葉一枚が散るも道ばたで犬の尿（いば）りするも、それを「想定外」の出来事と感得しうるような次元は、それらの議論でもやはり視野からはずされている。（このようなあたりまえのなかに絶えず「想定外」を感じるような注意力はどのようなものか、現場力においてそれはどのような位置をしめるか、それは別に考察すべき課題で、ここでは紙幅の都合で触れられない。）

現場力の養成を考えるとき、もしも好奇心に重きを置きすぎるなら、ものごとをあやつるばかりの技法にたけながら、知らずして野蛮な集団に陥る危険があるだろう。ビジネスなどの分野で追求される現場力にはそのような危惧がなきにしもあらずだが、私たちは真の驚きと知の困難さにこころして現場力の探求を進めねばならないだろう。

（小林恭）

2. ポライトネス

ポライトネスは、ブラウンとレヴィンソンが1987年に著書"Politeness"で発表した配慮行動についての概念である。日本では、わかりやすく説明するために「気配り」「気遣い」と訳されることもある。そのために敬語使用という待遇表現のみを日本的なポライトネスとして受け取られることがある。

ブラウンとレヴィンソンは、人間の汎用的な言語行動—言葉を使ってどのようなことを行うか—としての配慮をポライトネスとし、社会・文化・言語そのものが異なっても普遍的にみられる現象として提示した。

社会学者ゴフマンが1967年、慣用句にある「顔を立てる」「面子を潰す」といった比喩的な意味で、社会生活上で誰もが持つ他人に認められたい欲求をフェイスという言葉で提示した。それをもとに、ブラウンとレヴィンソンは成人した人間には社会生活を送るにあたって2つのフェイス（面—面子・顔とも訳される）があると考えた。1つは、社会生活上、他人に進んで認められたいという欲求をもつポジティブ・フェイス、もう1つは、社会生活上、もう成人しているのだから他人に関わられたくないという欲求をもつネガティブ・フェイスである。

ブラウンとレヴィンソンは言語学者の立場から、言語の中の特定の言葉が何をターゲット（標的）に発せられたのかに焦点を絞った。たとえば、ジョークでさえ、話者が相手を心地良くさせ、交渉事をスムーズに運ぶといった極めてストラテジック（方略的）な言語行動とみた。さらにポライトネスには、相手のポジティブ・フェイスに言葉巧みに配慮するポジティブ・ポライトネス、相手のネガティブ・フェイスに言葉巧みに配慮するネガティブ・ポライトネスがあるとした。

つまり、話者が積極的に相手に関わるために、相手のフェイスを考慮しながら「言葉を巧みに操って」行うのがポライトネスであり、対人関係が重視される現場ではこのような言語行動が求められることが多い。ポライトネスは、「黙っていれば伝わる」という概念とは対極にある。たとえ、相手がもう成人だからと関わりを求めようとしていなくても、話者の目的のためには、相手のネガティブ・フェイスに配慮する言葉を巧みに操りながら行うのが、ポライトネスの本質である。

引用文献

ブラウン，P.＆レヴィンソン，S.C.（著），（2010）『ポライトネス——言語使用における、ある普遍現象』研究社.

（中原京子）

3. 人それぞれ

現場にかかわる倫理的な問題、とりわけ答えの出にくい問題について学生に考えてもらおうと思いグループワーク等をさせると、必ず返ってくる返答に「何を正しいとするかは人それぞれ」という決まり文句がある。これは学校という場面だけではなく、何かしらの問題について考えようとする現場で話し合いをする際にも耳にする言葉なのではないだろうか。

確かに、事実、考え方や価値観は「人それぞれ」なのだが、その言葉をどういう意味で使っているのかを確かめようと思い、「考え方は人それぞれだから話し合っても無駄って話なの」それとも「考え方は人それぞれだから、私の意見を受け入れろって話なの」と聞くと、それには答えず怪訝な顔をしながらグループワークに入る。そしてグループワークが終わってコメントを書いてもらうと、また「考え方は人それぞれだから」正しい答えはない、わからないとある。一体、この「人それぞれ」とは何なのだろうか。

まず、考え方は人それぞれだから自分の意見がすべて正しく、だから他人は口を挟めないかというとそんなことはない。ある事柄において100％正しい意見などはなく、その人の意見には正しい部分とそうでない部分がある。そうした意見を他人とつきあわすことで、正しい部分はそのままに、そうでない部分を修正したり、新たな考えを付け足したりすることによって、新たな意見を形成していくことが、その場の合意や納得につながる。その意味で、話し合うことに意味がないことはない。

また、人それぞれという言葉は、そもそも自分の考えが定まっていないと、つまり何かしらの「軸」がないと使えないはずである。その言葉は自分の考えと他人の考えを、客観的に外から見比べてこそ意味をもつはずで、それ抜きに単に「人それぞれ」と言ってしまうことは、単なる無関心の表明にすぎない。

「人それぞれ」の考えがあり、本当はそこからが重要なのに、なぜかそこで止まってしまう。その先に行かない。行こうとしない。自己防衛なのか、考え方の「癖」のようなものなのかはわからないが、他人と何かを考えていくためには、この「人それぞれ」を超えていく必要がある。何かしらの現場においても、そこを超えていけるかどうかでその現場の「力」が試される。

私たちは意外とちゃんとした意見をもっていて、だから話し合うことに意味があるんですよ、ということが伝えたいのだが、どうもそこが伝わらない。「人それぞれだから」では済まないから問題になっているはずなのだが・・・。

（樫本直樹）

4. 現場力はケータイの細部に宿る

都心から郊外の住宅地に向かう沿線電車、午後11時。車内はそこそこ混んでいる。私は乗降口とは反対の扉に立ち、窓の外の夜景をみることをやめ、車内の進行方向をむかって座席の列を一瞥した。「座席は譲り合って詰めてお座りください」の車掌のアナウンスも虚しく、10名はすわれる座席に8名の男女の乗客が（さも今風であるかの如く）ゆったりと座っている。私が驚いたのはそのような座席エゴイズムあるいは許容身体距離の閾値の拡大のことではなく、そのうち7名が携帯電話を操っていたことだった。座席の前に立つ若者も4，5名いたが、すべてが次の駅までの20分間に少なくとも一度はそのコミュニケーションツールを指先で忙しく操作し画面を注視していたのだ。さて、奇矯な設問だが、携帯電話（ケータイ）と人間のあいだに現場力が発揮される瞬間はあるだろうか？　私はあると思う。

私のケータイは日本で最初期に販売されたスマートフォン（スマホ）である。使って3年になるのに、いまだ使っていないボタンがたくさんある。使うのは住所録に連動した通話機能、親しい人達とのSNS（ソーシャルネットワークサービス）、そしてイヤホンによる音楽聴取機能だけである。最近は、もっぱらこの最後の機能でCD20枚分の思想史の朗読を少しずつ通勤時間の間に聴くのが日課のようになっている。しかし、聴きたい部分をジャスト・イン・タイムで呼び出しストレスなく聴くまでには、何度イライラしたことだろうか。今は、操作の失敗に関する記憶がほとんど忘れられて「自然化」されているように思える。

しかし「現場力と実践知」の授業の中で、この身体操作に関する語りを院生たちに披瀝した時に、操作エラーの回数を最小化すること、機械のプログラミングの都合で予測できる読み取りエラーの予兆、ボタン操作と確認音でわかるスイッチの状態が瞬時にわかり、気づく間もなく操作していることなど、実にさまざまなことが身体化され、また、それを客体化して、彼らに延々と語ることができた。これにこれまでの感情体験や時間記憶、歩いた場所の心象風景などを加えて、延々と説明できるのだ。これは私にとって驚くべきことであった。まさにケータイを操作する私の現場力の言語化と言うことができないだろうか？　「自然化」した操作する身体は相変わらず沈黙しているが、外からキー（暗号・記号・言語）を与えてやれば人間は驚くべき情報を発露する存在なのだ。

（池田光穂）

5. パレーシアと現場力

パレーシア（Parrhesia）とは、古代ギリシャの修辞的表現のひとつで、語義は「すべてを語ること」である。このことから転じて、対人関係における語り方として、大胆に話すこと、素直に話すこと、腹蔵なく話す、という意味が派生している。パレーシアは、権力や治癒の力のある人（例：医療者）が、それのない人（例：病者）に使われるのではなく、その逆向きに使われて、はじめてそう呼ばれる。この概念を講義のなかで頻繁に取り上げた1982-1983年頃のミッシェル・フーコーは、真理が一転の曇りもなく説明されることが期待される近代合理主義の社会では、この語り方は久しく忘れられていたことを示唆する。他方でその論理的帰結として、既存の社会関係の力の差に抗い畏れを振り払い、真実のために大胆に語るというこの語り口は、それゆえフーコーによると、発話者と聴者がいる空間が民主的になることを要求すると言う。

現場とはさまざまな社会的な力学が交錯する場所である。しかし他方で現場は、社会的な力学を超えてその場に居合わせたメンバーが実践を紡ぎ出し、かつそのような状況を正確にかつ冷静に語ることを通して、その都度検証していかなければならない場でもある。では、パレーシアという発話タイプを抑圧する社会的力とは何であろうか。そのためには、接頭辞が異なるパレーシアの異義語を探せばよい。例えば失語症であるアファシア（aphasia）や発語障害であるディスファシア（dysphasia）である。現場でのこれらの用語は心身障害の語彙に含まれるのではなく、現場のもつ社会力学が、その場にいるメンバーに対して「沈黙を強いたり」「腹蔵なく話させなくしたり」することをさす。ただし腹蔵なく語れることは、現場力が発揮される前提条件であり、腹蔵なく語れると現場力が十全に発揮されるという意味ではない。語ることは、現場で身体を動かすことの一部であり、言語は記号化・抽象化されることで、現場に居合わせた人の協働に短時間に圧縮した情報を与えるツールにすぎないからだ。にも関わらず、現場力が発揮される場所は、パレーシアがおこなわれる場であるという可能性と意義は失われないだろう。「現場力が発揮される場所」と「パレーシアがおこなわれる場」との関係は、予想以上に複雑なのである。

引用文献

フーコー , M.（著）、阿部崇（訳）（2010）『自己と他者の統治』筑摩書房.

（池田光穂）

6. 志向的行為の引き継ぎ

しばしば私たちは、自分の気持ちを内面と言い、自分の身体の振る舞いや周囲の環境などを外側という。この「内」と「外」という枠組みは、自分の心は、他人にはわからないという「私秘性」を作り出す。それゆえ、他者の内部（＝心）を知ろうとしたとき、外部に見える表情や身体の振る舞いなどを自分の身体に置き換えて推測したり、感情移入をして理解したりする、というプロセスを想定せざるを得なくなる。この枠組みは、しばしば批判的に論じられてきた。

例えばメルロ＝ポンティ（1966）は、他人知覚を難しくしている理論的問題として以下の2点を挙げる。1つ目は、「心理作用とか心的なものとは、当人にのみ与えられているもの」（p.129）という考え方。2つ目は、「私の身体は私に、あなたの身体はあなたに、或る体感によって把握され、認識されうる」（p.130）という考え方だ。心理作用や身体の諸感覚を、個人の心や身体に帰属しようとするこれらの考え方は、他者への接近を極めて困難、かつ複雑な作業を介した営みにしてしまう。しかしそうであれば、私たちが日常的に行っている、複数の者と協働して働いたり、他者の苦しみや喜びをともにしたりするということも、容易に実現しない。

実際の現場での営みを見てみると、私たちが個々の私秘性に捕われているばかりではないことがわかる。例えば、24時間にわたって複数人の患者のケアを担う看護実践においては、その判断や行為等々を個人に還元させて考えることは難しい。看護師たちは、短時間の申し送りのみで、患者へのケアを引き継いでいく。そこでは、申し送ろうとしている看護師の考えを理解することが一義的に求められているわけではなく、患者の状態への関心や応答（＝ケア）という行為が引き継がれているのだ。患者の病状が急変した際には、互いに何をするのかを知っていてうまく呼吸が合うからこそ、何も言わなくてもさっと動ける。つまり、他の看護師がどのように動こうと考えているのかを理解するのではなく、患者への応答としての動きそのものと協働しているのだ。

現場における協働は、ともに働く者同士が向かい合って、互いの「内」を掴み取ろうとするよりも、ある目的の方をともに向いて、その世界に対する応答を交換し合っている。そのとき、一つの協働という実践が生み出されるのである。そして、その協働から個々の実践も浮かび上がってくる。

引用文献

メルロ＝ポンティ，M.（著）、滝浦静雄・木田元（訳）（1966）『眼と精神』みすず書房.

（西村ユミ）

7. 私たちの生はかくも不安定であり、他者たちと結びついている。

喪失、とりわけ愛するものの喪失に直面せざるを得ないとき、自分が失ったものが何であり、自分が何者であるのかも分からなくなってしまう。大震災のような出来事は、このような〈非知〉、私たちの生が不安定で（precarious）、他者に依存していること、その「脆さ（vulnerability）」を根っこから晒し出してしまう。

「私たちがある人を失ったとき、または、ある場所や共同体から引き剥がされたとき、私たちは自分が一過性のことを体験しているだけで、いずれ喪の期間も終わりを告げ、元通りに回復するだろうと考えがちだ。しかしひょっとしたら、私たちが喪失を体験するとき、私たちは誰なのか、に関する何かが露呈されてしまうのではないか。つまり、私たちが他者に結ばれている絆を際立たせる何か、言いかえれば、私たちが誰であるかを構成している絆を私たちに示すもの、私たち自身を構成する絆や結束（ties or bonds）といったものを、そうした体験が明らかにしてしまうのではないか。」（Butler, 22）

愛や性の関係は、自分ではどうしようもない仕方で私を拘束し、私を構成する。このことをフロイトは「リビードーの結束（Bindung）」と名づけた。このフロイトの発見をもとに、ジュディス・バトラーは、情熱、あるいは怒りや悲しみで我を忘れてしまうこと、脱自状態（ecstasy）に一つの政治的共存の可能性を考える。とりわけ、悲しみ、つまり自分が失った誰かのなかに何があるのかを知らない「非所有」という様式と空間こそが、「私の非知、私が根元的に社会的な存在であることの無意識の刻印」ではないか。そして、悲しみとは変容の最中にある自己が感じるものではないか、と。彼女は、9.11の事件を機縁にアメリカ国家の示した反応（復讐および、悲しみの攻撃性への転化）をメランコリーの症状と関連づけて批判し、むしろ暴力や喪失に対する悲しみのもとにとどまり、悲しみを公けのものとし、その非知や非所有に晒されたまま、私たちの脆さを承認しあうことを通して暴力（の転移）とは異なる共存の可能性を探ろうとする。

いつまでも悲しんでばかりはいられない、と人はいう。だが悲しみは本当に何ももたらさないのだろうか。震災や事故によって故郷を奪われる悲痛さに耳を傾けることは、それを個人のものだけでなく公けのものとして承認することである。聴くという経験において私たちは無傷ではおれないが、それは同時に新たな絆の誕生を刻印するだろう。

Butler, Judith（2004）, *Precarious Life*, Verso. =（2007）本橋哲也（訳）『生のあやうさ』以文社.

（本間直樹）

8. 尊厳する

「先生、この前の実習では、バスタオル使ってちゃんと尊厳してきました」と嬉しそうに看護学生が話す。「尊厳」を動詞形にして話す学生に戸惑いつつ私は深く頷けるものを感じた。専門職の倫理観には不可欠で、人間としての尊厳を保つように教えよと声高に言われる。「尊厳」は日本国憲法にも医療法にも介護保険にもうたわれ、各種報告書にも盛り込まれるキーワードである。おかげで耳にすることが増えたものの抽象的な感覚は拭えず学生は不消化だった。

私は前の授業で高齢者施設（以下施設）でのターミナルケアのエピソードを語った。エルメスの豹柄、大判1枚のスカーフにくるまり丸まっているAさんの様子を見て「裸でオムツ剝き出しなんて尊厳がありません。あんまりです。」とあるスタッフが泣きながら私に訴えてきたことがあった。Aさんは肝ガンの終末期の70代の女性。治療効果が得られず、最期を病院でなく施設で過ごすことを選び退院してきた。介護室に落ち着いたAさんは描きためた仏画を前に「楽に逝きたいからよ」とウィンクをした。最期の日々、110×200cmのベッドに145cm35kgに満たない小柄な身体が丸まり、何かをつかもうと手は空をつかみ、腹水による腹部の緊満感のためにあえぎ輾転反側していた。腹部の緊満はAさんを苦しめパジャマも毛布も薄い羽根布団も受け付けなかった。私たちケアする者の課題は周囲にどう見えるかではなくAさんが望んでいる事に応えることだった。私たちはAさんがパジャマを着ていようが裸でいようがAさんがAさんであることには違いがないと思っていて、いつもと同じく傍に寄り添いAさんの気持ちややり方を丁寧に確かめ、推測しながら事を進めた。腰や背をさすり安らかさを見いだし宥めていった。人生の幕引きに携わる者として命を助けることはできないけれども「痛み」を和らげて「死ななければならない無念さ」にうなづき、心残り（又は「心の凝り」）に対応する。Aさんへの思いを具体的な見える形（行為）に表わそうとする、だから動詞なのだ。動詞であるべきと学生から教えられた気がする。一場面を切り取って見ると尊厳が「ある時」「ない時」と二分化しがちである。Aさんに続く方々の念いに応えるためにも「自分や大切な人が『されたくないこと』を決してしない」過程で「尊厳する」行為が増えて欲しいものだ。

Aさんをふわりと包んだスカーフは親友からのプレゼントだった、と没後に知った。

（上條美代子）

9. 散歩

家の玄関を出てどこかへ行く際に、自分の足で歩くだけということはとても少ない。中学生ぐらいまでは、運転免許証もなければ、電車やバスに乗るお金もなかったので、歩くか自転車に乗るほかななかったはずだ。あの頃は、それを別段に不自由だとは思わなかった。人は変わっていく。

健康に良いという理由で、ウォーキングを愛好する人たちが多いのは知っていた。しかし、自分には縁のないことだと傍観していた。正確に言えば、熱心に歩く人を見かける機会すら少ない日常だった。ただ歩くだけで、何が変わるのだとさえ考えていた。ところが、たまたま自分の身に三日間の歩き遍路を体験する予定がはいって、今年の夏から朝の散歩をはじめることにした。

しばらく散歩を続けちるうちに、やはり、歩かなければ、見えないことも、聞こえないことも、知ることもできないこともあるのだと、思い知らされた。

夏の朝は、早くから明るい。午前6時前に、運動靴を履いて外に出る。どこに行こうかと少し迷うが、家の近所なので、いくつかの道は歩き慣れている。そのはずだった。何となく南に向いて歩いて行こうと道を進むうちに、自動車の運転席から何度か見たはずの町へ入り込む。小さな路地が、ぼくを手招きするように誘う。用事もなく知らない家の玄関先を歩き続けると、奇妙な気分になってくる。とうの昔に廃業したであろう店の看板や、壊れたまま放置してある単車に乗っかっている猫、もう開店している小さな喫茶店。どれも目を見張るほどの珍しさはないのに、新鮮な印象を強く感じる。予定してない道順をそぞろ歩くことで、次々とぼくの前に現れてくる人々の暮らしの断片がある。

何日もの間、朝の散歩は続いた。早朝に元気よく歩いているお年寄りの姿を見かけることも増えた。スタッ、スタッという足音が背後から近づき、あっという間に追い抜いていくのは痩せたお婆さんだったりする。いつも気ままに歩くので、道順は適当なのだが、何度か歩いていると、路地と路地が結びついて、身体の中に町の地図ができてくる。それで、わざと知らない方向へ足を向ける。都会の朝にも小鳥や虫の鳴き声があること、元気なお年寄りは朝に活躍することも知った。自分の予定や、目的地までの最短距離を考えずに動くことで、出遭う数々の出来事に興味は尽きない。散歩することで、自分の住む町が、ようやく身近に感じられるようになった気がする。

（西川勝）

10. 「想定外」という試金石

東日本大震災以来、「未曾有」の原発事故について語られるとき、「想定外」という言葉をよく耳にする。「想定」とは、畑中洋太郎の定義によれば、さまざまな制約条件を加味したうえで、ある「境界」、つまり思考する範囲を設定することを言う。また柳田邦男があえて大胆に一般化して言うところによると、何を想定し、何を想定外とするかについては、理学系では可能性のマキシムに目を向けるのに対し、工学系では経験主義・現実主義に頼らざるを得ない傾向があると言う。

システムエンジニアをしている私の夫は常日ごろ、「想定外の出来事にいかに対処するかに現場力が問われる」と話している。実際の現場では時間やコストといったさまざまな制約があるため、際限なくベストを追及することは叶わない。どこかで折り合いをつけねばならず、経験に基づいて「ここまでやれば大丈夫なハズ」と「想定」して、システムを設計する。こうした「想定」は、実用的なモノ作りの現場にかぎらずとも、例えば医療の現場であれば治療に関してなど、およそあらゆる現場においてなされていることであろう。

しかしここで忘れてはならないのは、この「大丈夫なハズ」という自由裁量には、いくら綿密な経験的データに基づいていようとも、想定する人間の「思い込み」が入り込む可能性があるということである。このことに関連して畑中は、人間には「見たくないものは見えない」し、「考えたくないことは考えない」という心理がはたらくため、ともすれば想定が見誤られてしまうことを指摘している。それゆえに「つねに想定外を想定し、思い込みに気づいたら速やかに修正することが重要」だと、夫も日々自らを戒めている。

われわれの住む世界のほとんどは、こうした想定内で思考されたモノゴトで成り立っていると言えよう。だとすると、いかなる難攻不落の城さえも、一瞬で波にさらわれてしまう砂の城と二重うつしに見えているのでなければならない。想定内の平穏に感謝しつつも、過信と固定観念は打ち崩されねばならない。想定内は無限の想定外に包まれている。マニュアルに載っていない想定外が現れたる場こそ、まさに現場の底力が試されることになる。

参考文献

畑中洋太郎（2011）『「想定外」を想定せよ！：失敗学からの提言』NHK出版.
柳田邦男（2011）『「想定外」の罠：大震災と原発』文藝春秋.

（岡野彩子）

11. 月のもとにいる

“満月”の日に、月のもとに何人かが集った。この満月には、不思議な“ちから”があるらしい。その“ちから”に、あまり出会ったことがないと思っていた。しかし、皆で満月について語り合うと、いくつも思い当たることが出てきた。そういえば、調査先の病院で、満月の日にたくさん出産があったと聞いた。犯罪も多いらしい。ある人は、川の水位が「（腕を縦に大きく広げて）こんなに」上がってきて驚いたという。出会ったことがないと思っていたのは、その日が満月であることを意識して暮らしてこなかったからだろう。

しかし今月（2011年10月）は違う。仕事の帰り道に、ふと空を仰ぐと、橙色の真丸な月が夜空を照らしていた。「満月」であることは、その日、何かで聞いた、あるいは読んだ。が、月が目に入るまでは忘れていた。月を見て、それを知っていたことに気がついた。その次の日に月のもとに集った。皆で月を見ていたら、誰かが月に手をかざした。それに釣られるように、皆が月に向かって手をかざした。誰かが「温かい」と言った。「ほんとだ」と応じた。そうだろうか。「反対に向けると、ひやひやするよ」と誰かが言った。試してみた。「反対に池があるからだよ」。ついつい、ひやひやの根拠を求めたくなる。月が暖かいわけでなく、池の方が冷たいから相対的に暖かく感じる、と。――知らぬ間に、因果関係の罠にかかりそうになった。

そんなことより、月の右下に小さな光を見つけたこと、さらにその下で、木の葉が揺れていたこと、空が私たちを包んでいたこと、何よりも、皆が手をかざしたその影が、月夜の景色を作っていたこと、それに浸っていることが心地よかった。もはや私たちは、空を見ているのではない。月に照らされ、月からまなざされて月影となり、月とともにあった。

視線を足元におとすと、私の体が、うっすらと足元（ここ）から向こうの方へ伸びていった。足元でつながれたもう一人の私を知ったとき、空を見上げることを忘れていただけではなく、月が映し出しているもう一人の私とともにいたこと、それを見ていながらも見えていなかったことを知った。月影を伸ばしながら、それとともに歩いていたにもかかわらず。月夜は、私の存在が世界とともにあることを控え目に、ずっと前から教えてくれていたのだ。ひやひやする池のまわりの「ムーンウオーク」で、そんなことを思った。

（西村ユミ）

12. 障害を笑う（其の三）

障害や不幸を笑うのは不可能なことだ。本当に笑いが生まれたとすれば、それは水の上を歩くことや病人を治すことよりも、また死者の復活よりも驚くべき奇蹟である。この世は、嘲笑や追従、自嘲の笑いなどさまざまな見せかけの笑いに満ちているが、真の笑いはそのような所には到来しない。

「笑いとは、他人の失敗をよろこぶこころであって、しかも良心の疾しさをともなわぬものをいうのである」とニイチェは非情な言葉を吐いたが、真の笑いはある意味非情なものである。人の不幸や障害を見て手助けや施しをする、同情を寄せるならまだしも、それを笑うとは何事かと人情家の善人は言う。しかし我々は、彼ら人情家が不幸な人に向けて浮かべる同情の微笑にこそ偽善の腐臭を感じるのである。彼らの薄ら笑いはこう告げている。「哀れなるかな、不幸な者、障害を持つ者、しそこなった者たちよ。君等の不幸が私のものではなくて本当に良かった！」

人情としては、失敗や障害や不幸は避けるべきものであり、それが降りかかったのが「わたしでなくてよかった」という情を持つことは自然なことだ。だから不幸や障害への蔑みを伴った、それらの存在の否定の上で成り立つ同情や憐憫はある意味、自然な人情の働きである。だが、ニイチェの言うように、そうした人情家の微笑には疾しさがつきまとう。己が手を差し伸べようとする者を、同時に蔑み、否定することしかできない者の疾しさが。

しかし我々は、同じ瞬間に、真の笑いの到来を待ち望むのだ。己や他人の障害や不幸や、しそこないを心からよろこび、高らかに笑うその瞬間を。「これでいいのだ！」「こんな腐れ男女、博士くずれでよいのだ！」「我々がこれを望んだのだ！」と障害や不幸に心から同意するその時を。むろん障害や不幸をよろこび、同意するなど、人情の世界では不可能なことである。「不幸への同意」を意志する者は、人情の世界を超えた、メタフィジカルな情、非情の風に吹かれている。運命の差異によって無限のへだたりにある障害を持つ人とそれを笑う人とは、施しや同情の微笑においてではなく、この「同意」の爆笑においてのみ、はじめて一つになることができる。

今日も我々は、ビニール袋を着ては破りながら、とっくに廃れた昭和歌謡を口ずさみながら、この世に非情の風と真の爆笑が到来するのを待ちのぞんでいる。（完）

参考文献

Weil,Simone（1950）*Attente de Dieu,* La Colombe = 渡部秀（訳）（1967）「神を待ちのぞむ」『シモーヌ・ヴェイユ著作集Ⅳ』春秋社.

赤塚不二夫（2005）『天才バカボン』（赤塚不二夫傑作選），小学館.

小林恭（2009）第91回現場力研究会発表および配布資料

（高橋綾）